２．日上畝山古墳群をめぐる諸問題

（１）美作の埴輪とその特質－加茂川流域のⅣ期～Ⅴ期を中心として－

美作で埴輪の出土した古墳は約 60 基を数える。その内時期が判明しているものでは、前・中期が少なく、中期末から後期が圧倒的に多い。

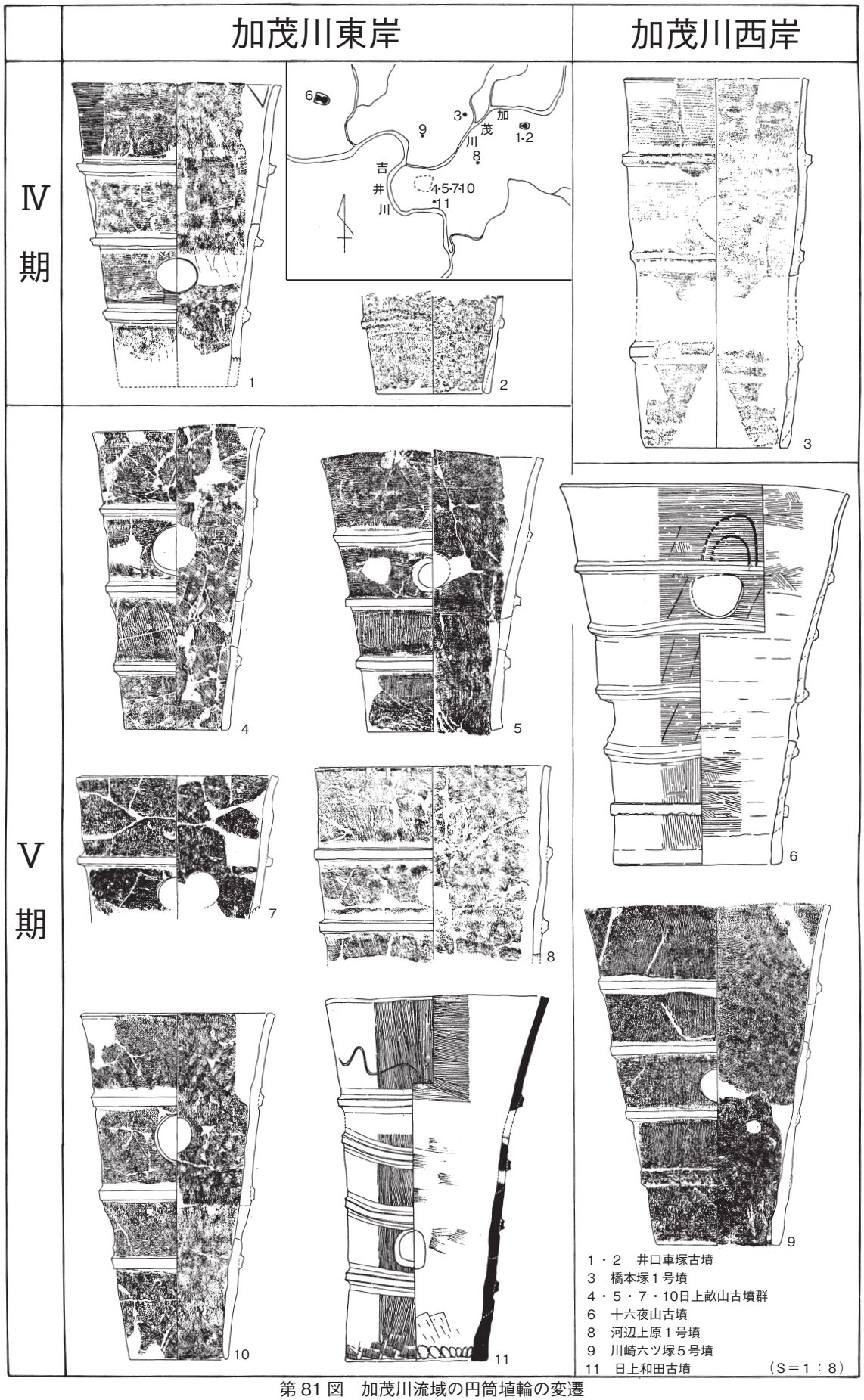
前期の例は津山市美和山１～３号墳（前方後円墳 81 m、円墳 34m、円墳 36 m、註１）がある。またこれら埴輪には線刻が見られこれが、いわゆる特殊器台型埴輪の系譜によるものか、全体像が明瞭でないため定かではないが、隣接する二宮遺跡（註２）の埴輪には先刻が見られないため単発的なものであろう。これら美和山古墳群周辺で埴輪をもつ古墳の系譜を考えると、時期はやや下るが西方高所にある下田邑局笠古墳（円墳 30 m、註３）が考えられる。葺石を伴い埴輪が採集されており、立地状況から美咲町月の輪古墳（円墳 60 m、註４）と同一時期の可能性が指摘できる。他には津山市奥の前古墳（前方後円墳 68 m、註５）があり埴輪は楕円形の円筒埴輪である。このように前期においては、前方後円墳などの一部で埴輪を使用する。なお、埴輪を使用しないものは、土師器の二重口縁の壺を使用しており、日上天王山古墳（前方後円墳 57 m、註６）、鏡野町赤峪古墳（前方後円墳 45 m、註７）、田邑丸山２号墳（前方後方墳 40 m、註８）などがある。

前期末から中期前半頃においては、月の輪古墳に代表されるように径 50 mを超える円墳が首長墳であるが、これら円墳があるのは月の輪古墳周辺のみで、隣接する釜の上古墳（円墳 59 m、註９）にもヨコハケをもつ埴輪がある。これら大形円墳の下に属しているのが、小形の円・方墳であるが、当時は方墳が主流で、下道山南古墳（方墳 15 m、註 10）のように埴輪を少量もつものがある。後半になると、須恵器の導入と相成って埴輪を使用するのは径 30 mクラスの円墳などになり、中期末以降は埴輪を使用する古墳も増え、20 mに満たない円墳などにも使用されるようになる。

日上畝山古墳群のある加茂川流域の中期後半から後期前半のおよそⅣ期後半からⅤ期前半の埴輪のおおまかな変遷を表したのが第 81 図である。

加茂川東岸の井口車塚古墳（第 81 図１・２、帆立貝 35m、註 11）には形象埴輪（盾・人物・家など）も見られ、埴輪に須恵質のものが見られる。３条突帯で外面の底部以外はヨコハケである（１）。このヨコハケはＢｃ種（註 12）ヨコハケで一部ではやや傾いたＢｄ種に近いものも見られ、基本は突帯間を１回でめぐっている。また、最下段の突帯に押圧技法（註 13）のようにやや扁平なものも見られる（２）。報告書では、ヨコハケをＣ種（註 14）とし、陪塚と考えられる円墳出土の須恵器からⅤ期の埴輪としたが、その後再考しⅣ期に改めたい。西岸の橋本塚１号墳（同３、円墳 30 m、註 15）には、淡輪技法（註 16）があり、タタキがヨコハケ風に施されている。このことから、埴輪製作に須恵器の技術が導入されている。同様に底部のみヨコハケ風のタタキが省略されており、形態は異なるがヨコハケを施すといった技法は井口車塚古墳と同じで、同様にⅣ期の埴輪であろう。この埴輪は系譜的には断絶する。以上から、少なくともこの時期東西両岸に技法の違う埴輪が見られる。

中期末以降後期前半にかけて、古墳群の形態が変化する。径 10 ～ 20 mクラスの円墳が多数造られる。これら古墳を統括したのは全長 20 ～ 60 mの前方後円墳であるが、これら円墳にも埴輪を伴うものが増えてくる。日上畝山古墳群で出土したＡ類（同４・５）はＴＫ 47 型式の須恵器と共伴し、Ｂ類（同７）はＭＴ 15 型式～ＴＫ 10 型式、Ｃ類（同 10）はＴＫ 10 型式と共伴する。「円筒埴輪総論」ではこのＡ類をⅣ期、B･C 類をⅤ期としている。Ａ類にはヨコハケが見られるが、吉備ではⅤ期まで残るとされ（註



第 81 図　加茂川流域の円筒埴輪の変遷

17)、このＡ類には底部調整も見られるので、Ａ～Ｃ類はいずれもＶ期の範疇で考えたい。Ａ類と同じ時期の西岸にはやや離れた位置ではあるが、十六夜山古墳（同６、前方後円墳 60 m、註 18）が造られる。墳形・規模が異なるため埴輪も大形であるが、５条突帯でＢ種ヨコハケが見られ、最下段の突帯は押圧技法である。

Ｂ類の時期は河辺上原１号墳（同８、円墳 16.5 m、註 19）に類例がある。突帯間の距離など全体の形状やタテハケの状況、胎土が良く似ているものがある。同一の窯で製作された可能性がある。この古墳には口縁部に突帯がめぐるものもある。この時期の西岸には六ツ塚古墳群（註 20）があり、この５号墳（同９、円墳 15 m）の埴輪は４条突帯で外面はタテハケ、内面はヨコ・ナナメハケで底部調整が見られ、押圧技法を伴う。おそらく、東岸がこの時期３条突帯にほぼ統一され押圧技法をほとんど伴わない（註 21）ため、六ツ塚古墳群の埴輪は十六夜山古墳からの系譜が推測される。吉備南部の押圧技法の編年（註 22）では須恵器編年のＴＫ 216 からＴＫ 10 型式まで３段階に分けられ、加茂川流域においても初現が井口車塚古墳（ＴＫ 208 型式か）で、十六夜山古墳（ＴＫ 47 型式）、六ツ塚５号墳（ＭＴ 15 ～ＴＫ 10 型式）とほぼ同様の系譜である事がわかる。

Ｃ類の時期の類例は、東岸では日上和田古墳（同 11、円墳 19 m、註 23）があるが、４条突帯となっている。この４条突帯は東岸には見られないもので、西岸の六ツ塚古墳群にあり、内面のハケ調整などその系譜が川をわたって伝わっているものと推測されるが、押圧技法は見られない。この時期以降の埴輪の規格性は明瞭でなく、横穴式石室墳での埴輪はほとんど見られなくなる。

以上から加茂川流域の埴輪の特性をまとめると、Ⅳ期の後半の段階にほぼ東西両岸に埴輪が見られ、その特徴には埴輪工人の系譜的な違いが見られる。おそらく、その技術的系譜は、一部で井口車塚古墳に吉備南部の押圧技法的なものが見られるが、その他は畿内地方からの影響である。Ｖ期になり、西岸には押圧技法が見られ、次の時期にも同様の技法が見られるためある程度系譜がおえる。ただ、東岸については、今の所この技法は井口車塚古墳以降ほとんど見られず、日上畝山古墳群のＡ類には口縁部に突帯がめぐる畿内地方の特徴も見られ、両岸において技術の系譜が異なるようである。ちなみに、この時期以降両岸で石見型の盾形埴輪も見られるようになるが、東西で文様が異なりこれも系譜が異なる。Ｖ期の後半になり横穴式石室が導入されると、埴輪はほとんど使用されなくなる。これに代わるように陶棺が棺桶として使用される。陶棺の製作には埴輪工人が大きくかかわっている事が考えられ、この陶棺が急速に美作全域に広まった。このため、陶棺にとって代わられた埴輪自体の生産はほとんど終焉を迎えるのである。

（小郷）

（２）日上畝山古墳群の評価―その特質―

日上畝山古墳群は今回の調査の結果、総数 70 基以上はある事、古墳群の時期は、南端にある前期の日上天王山古墳築造後から後期の６世紀前半頃まで築造されていることが判明した。その特徴は

(A) 前方後円墳は日上天王山古墳と最終段階の 58 号墳の２基がある。

(B) 古墳群の大半を占める中期末から後期前半の古墳は埴輪をもつものが多く見られ、また埴輪の種類、量が豊富である。埴輪の中に畿内の特徴が見られるものがある。

(C) 初期の横穴式石室墳がみられない。

以上３点の特徴を踏まえ日上畝山古墳群の位置づけを考えたい。